

的にいえば、ヤンゴン周辺の管区ビルマか、そうでなければタイ国境に近い少数民族地区が、我々がミャンマーについて知りうる情報のほとんどを占めていた。この極端なアンバランスを、本書はミャンマー人研究者をも執筆陣に招き入れることで是正しようと試みている。今後のミャンマー政情が民主化に向けて推移していった場合、研究者を含む外国人の入国条件が緩和される可能性もあり、そうなった暁には、本書の先駆的価値は改めて評価されることになるだろう。

また本書全体を管区+少数民族7州という構成にしたことも、実験的試みとして評価してよいように思われる。中国などでは各自治区に一定の紙幅を割いて、多民族国家としての性格に着目した類書が多く出ていることを考えれば、ミャンマーに関してもそろそろそういう視点の本が出てよい頃である。これまでのミャンマーのいわゆる「少数民族モノ」は、やや内戦ジャーナリズムに偏りすぎてきたきらいがあるので、学術的な立場からこうした書が世に出るのは隣国を研究する者としても大いに歓迎したい。

この8世界分類という本書の構成については、あるいは異論があるかもしれない。しかし評者がここで指摘しておきたいのは、この構成それ自体が、中央政府と少数民族勢力双方に対する痛烈な皮肉を含んでいるという点である。政府による「世界」分類をそのまま取り入れたことの背後にあるのは、どうせ民族など虚構なのだから、だったら今ある区分を前提にしても問題なかならう、という、かなりシニカルな視点である。つまり実はこれは、国家や民族に対する、徹底的に突き放した視点によって逆説的に可能になっているのである。

このように本書は、概説書には不釣り合いなほどに分厚い内容であるが、その厚さに見合った満足を読者に与えてくれると評者は考える。しかし惜しむらくは、まさにその厚さである。

ひとことでいうと、本書は少々欲張りすぎである。初学者にミャンマーの各民族を紹介するのか、専門家向けに民族誌を提供するのか、あるいはメタ民族誌批判にまで踏み込むのか、という三つの選択肢の中で、本書はこの三兎を同時にすべて追おうとしているように見える。これは明らかに欲

張りすぎであり、その結果としての700ページ強という厚さである。この厚さがせっかくの初学者の食指を遠ざけてしまうのであれば惜しい。

また、本書の各章と終章とのあいだにもやや齟齬があるように感じられる。奇妙な表現だが、終章が本書全体に対する、かなり辛辣な書評になってしまっているのである。なぜなら、民族本質主義批判の立場に立つ編者の視点から、これまで読み進めてきた各民族の事例そのものが、実は民族本質主義の症例であったかのごとく再提示されるためである。これは読者の意表を突く「ちゃぶ台返し」であり、こうした手法は評者個人としては決して嫌いではないが、読者に対してはやや不親切であるとともに、また少なくとも一部の執筆者にとっては気の毒でもある。このあたりはもう少し工夫できたのかもしれない。

この書評を執筆している2013年から本書が刊行された2011年を振り返ると、まるで遠い昔のようにすら思えてしまう。それぐらい、この二年間のミャンマー情勢の展開はめまぐるしい。にもかかわらず、本書をいま読み返して、さほどの違和感を覚えない。論述スタイルにムラこそあれ、各執筆陣が時流におもねらない歴史観をもっているためであろう。出版社においては、雑音を気にすることなくぜひ版を重ねてほしいと切に願う。すでに述べたように、本書の価値はむしろ時間を経るごとに高まっていくと考えるためである。

(片岡 樹・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

矢野順子、『国民語の形成と国家建設——内戦期ラオスの言語ナショナリズム』風響社、2013、342p.

「国民語」はいかに「つくられ」、いかに国家建設の過程にかかわるのであろうか。それが本書の根源的な問いである。その問いに対して、ラオ語（著者はラオスの主要民族であるラオ族の言語がラオスの国民語となっていることを示す意味で、本書では一貫して「ラオス語」ではなく「ラオ語」を使用している）が国民語として形成され

ていく過程を、植民地時代以降、時代順に丹念に分析、考察することによって答えを導きだしているのが本書である。

その際、すでにナショナリズム研究の古典となっているベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』における、出版資本主義の発展が「想像の共同体」を生み出したとの議論を援用しつつ、批判的に検討し、分析の視座としてトンチャイのいうところの「否定的同一化」を挙げている。「否定的同一化」とは他者との相違による自己規定のあり方で、ラオ語が国民語となる過程においては常にタイ語とラオ語の差異化がはかられ、それによってラオ語が規定されてきたことが「否定的同一化」にあたると言う。

そして、こうした現象は何もラオ語にだけ特有なのではなく、「アウスバウ言語」（隣接する言語との差異を強調することによって人工的につくられた言語）にはある程度共通してみられると、社会言語学の理論的枠組みの中にラオ語を位置付けている。ラオ語という一言語の研究を個別ラオスの事象を越えて一般化し、社会言語学という学問分野における成果としても本書を世に問いたいという著者の姿勢をここに見ることができる。著者は、指導教員から、「ラオス研究者だけが読んでおもしろい論文を書くな」との厳しい指導を受けたと「あとがき」にあるが、そうした指導を意識して本書を執筆していると言えるであろう。評者は残念ながら社会言語学については門外漢であり、社会言語学上の本書の意義について述べることはできない。しかしながら、本書は、ラオスの国家建設をラオ語の国民語としての形成から論じたラオス研究として、ラオス研究者を含むラオスに関心のある読者の期待に応えているだけでなく、社会言語学的な関心、ナショナリズムへの関心を持つ読者の期待にも応えようとの配慮がなされている。

以下、ラオスに関心のある読者の立場から本書を紹介したい。本書は序章と五つの章、そして「おわりに」からなる。序章で前述の理論的枠組み、先行研究、史資料について論じた後、第一章では、14世紀に成立したランサン王国から、ラオス内戦期までの歴史の概要がまとめられている。いわばここまでが、本論に入る前の前提である。

第二章では、1893年から1945年までを対象に、フランス植民地時代のラオスでラオ語をめぐってどのような議論が展開されていたのかを丁寧に論じている。植民地支配下において、支配者であるフランス人は、植民地支配の都合上、さらに、植民地支配の正当化のため、ラオ語と向きあわざるをえなくなった。そのため、国民語の基礎となる部分を「つくる」作業は、まず、フランス人によって担われることになり、この時期、フランス主導でラオ語の正書法を確立する作業が開始された。

ラオ語の正書法を確立する過程においては、発音するとおりに綴るべきだとする音韻型の正書法と、パーリ語、サンスクリット語からの借用語に関しては、もとのかたちを綴りに反映させるべきだとする語源型の正書法のどちらを採用するかに議論が収斂した。音韻型を支持したのはフランス人とフランス語に精通したラオス人エリートであり、教育の普及のためには簡便な正書法が良いとの主張であった。結論がなかなか出ないまま正書法に関する会議が断続的に続くなかで、ラオス人エリートは語源型の正書法であるタイ語との差異を意識し、そこからタイ語に対するラオ語の優位性、進歩性を認識していった。こうして、フランスの思惑を超えて、ラオス人エリートの間に言語ナショナリズムが醸成されていったのである。一方、語源型を支持したのは仏教関係者であり、彼らは仏教と仏教教育制度の近代化を視野に入れてそのように主張したのであった。

いかなる正書法を採用するかをめぐって、音韻型と語源型の主張は異なっていたが、双方とも現在のラオ語の状況が最善だとは考えておらず、あるべきラオ語を「つくろう」としていた点は共通している。酒井直樹が「国民語は、国民という統一体がそうであるように、仮設され、未来に向かって制作されなければならないものとして、構想される。しかし、そうして投射された未来の目標へと至る軌跡は、喪失された本来性への回帰、自らの生の深部に宿る起源への同一化、の過程として空想される」〔酒井 1996: 206〕と指摘したように、フランス植民地時代のラオスで、まさにラオ語が“未来に向かって制作されなければならないもの”として構想され始めたのであった。

1940年代に本格的に議論され、導入が試みられたラオ語のローマ字化が、結局、実現されずに、その後ローマ字化の議論がなされなかったことも、こうした国民語が構想される軌跡から理解できる。そして、植民地時代に、統一されたラオ語の正書法が確立されなかったラオスにおいては、酒井の指摘したような状況が、次の王国時代に、よりはっきりとした形で継続していく。その過程を明らかにしたのが第三章である。

第三章では、独立国家となったラオス王国において、ラオス文学委員会やラオス・ロイヤルアカデミーといった公的機関のラオ語に対する見解と、新聞や雑誌で展開された知識人や民間の非公式な見解の双方を詳細に分析している。著者がラオ語の標準化と呼ぶ、正書法の統一や近代語彙の整備などにおいては、公的に責任を持つ機関にしても民間の機関にしても、もっぱらタイ語と比較し、タイ語と距離を保つことを第一義として、ラオ語を規定するという「否定的同一化」がみられた。それと同時に、ラオ語、ラオ族の「歴史」や「起源」に関する言説が唱えられ、それが、失われた本来のラオ語を「復興」させなければならないとの言説に結びついた。しかし、実際には、どのようにラオ語を「復興」させるかをめぐって、仏教と世俗という異なる教育バックグラウンドを持つ知識層の対立は深まる一方であった。さらに、教授言語、行政言語として使用されているエリートの言葉、フランス語の存在や、映画やラジオなどの新しい娯楽を通して侵入してくるタイ語の存在が、ラオ語の標準化への道のりを険しくしていた。

第四章では、王国政府に対して、左派勢力であるパテート・ラオが、国民形成においてラオ語をいかに活用したのかについて考察している。少数民族を統合する必要に迫られていたパテート・ラオは、標準語としてのラオ語の普及を試みた。識字教育の実施や教育言語としてラオ語を採用するだけではなく、イデオロギー面でもラオ語の優位性を訴えることで、ラオ語の標準語としての地位を固めていった。

本章で著者は、標準語 (phaasaa kaang) という語を使用している。ラオ語の phaasaa kaang を日本語に訳すと標準語とするのが適切であるからであ

うが、ここで使用されているラオ語の phaasaa kaang の意味するところについてもう少し説明があるとわかりやすかったと思う。著者は、パテート・ラオ側のラオ語教本、プーミー著『ラオ語文法』はシェンクワン方言によって説明されているが、プーミー自身はシェンクワン方言ではなく、ヴィエンチャン方言を「標準語」と呼んでいたことを指摘している。ここで使用されている「標準語」は、日本語の「標準語」という語感から違和感がない。

日本においては、「標準語」という言葉の初出は1890年のことであったとされ、「国語」（日本では国民国家日本における統一した言語として「国語」の確立が目指された）の内実を担うものとされたのが「標準語」であり、「標準語」は「方言」との対比で語られた〔安田2000: 68-69〕。

「標準語」という概念が「方言」の存在によって規定されるのであるならば、ラオスにおいても様々な「方言」が存在するからこそ「標準語」の確立が目指されたと考えられる。その意味で、ヴィエンチャン方言を「標準語」と呼ぶのは納得できる。しかし、本章のその他の箇所では著者が述べている標準語とは、「方言」との対比で語られる「標準語」ではない。「」の有無により、区別しているのかもしれないが、日本語の語感では標準語というより共通語としたほうがわかりやすかったのではないであろうか。この意味でラオ語の phaasaa kaang の意味するところ、パテート・ラオがこの時期 phaasaa kaang をどう理解していたのかについて知りたかった。

また、著者の関心、本書の目的からすれば、ヴィエンチャン方言がいつ頃、どのような過程で「標準語」と認識されるようになったのかまで考察の射程内であろうが（ちなみに、現在のラオスでは、標準語として明確に定められているわけではないが、ヴィエンチャン首都区の発音が規範的であるという認識が主流である〔鈴木2010: 265〕）、パテート・ラオにとって、書きことばにおけるラオ語の「統一」を目指すということが現実的な選択であったと、それ以上の言及を避けている。プーミーがヴィエンチャン方言を「標準語」としている以上、どこかで方言との対比でラオ語における

「標準語」確立を認識する状況が生じたのではないかと想像できるが、それに関する史資料が全くないのか、そもそも議論がなされていないのかなど、説明がほしかった。

第五章では、著者は第二章から第四章までの議論をまとめ、ラオスの言語ナショナリズムについて総括している。そして、「おわりに」では、序章の理論的枠組みにもう一度立ちかえって、本書全体を総括しており、丁寧でわかりやすい構成となっている。

本書で考察されているラオスの言語ナショナリズムは、言語というより文字ナショナリズムと捉えたほうがわかりやすい側面がある。著者はラオ語の標準化をタイ語との「否定的同一化」で説明しているが、ラオスにおいては、ラオ語とタイ語の差異が方言ほどであるのと同じように、ラオ語にも存在する様々な方言〔上田 1996: 94〕が、標準化の議論から捨象されてきたのである。これは一体どうしてなのだろうか。この点に関する著者の見解が十分でないのが残念であるが、ラオスにおいては、議論の中心には文字があった。著者の考察から、文字数や綴りにおいていかにタイ語と差異化するかが標準化の議論の中心になってきたことは明らかである。ラオ語とタイ語の差異は問題になるが、ラオ語における方言の存在は標準化にとって問題にならないのであるとしたら、ラオ語を国民語として形成していく過程は、第三章第一節(4)で著者が説明している文字ナショナリズムと捉えたほうが適切であろう。いかに文字を綴るかということが、ラオスでは、植民地時代以降、一貫して大きな課題であり、ナショナリズムの発露となり続けてきた。文字ナショナリズムに収斂するナショナリズムのあり方、そこにラオスを見るのは評者だけではないはずである。

ラオス研究においては、史資料状況が厳しいことが研究上の大きな制約となっているが、著者は、この分野における可能な限りの史資料を収集しており、その努力に敬意を表したい。本書は、世界各地の史資料を丹念に収集し、読破した結果生まれた、著者渾身の成果である。著者はラオス研究の成果としてだけ評価されることを望んでいないであろうが、研究が多いとは言えないラオス研究

において、ラオスナショナリズムの質を詳しく分析した本書の意義は計り知れない。これからのラオス研究において必読書となる本書が、より多くの読者を獲得することを願ってやまない。

(菊池陽子・東京外国語大学大学院総合国際学研究院)

参考文献

- 酒井直樹. 1996. 『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史—地政的配置』東京：新曜社。
- 鈴木玲子. 2010. 「耳を澄まそう、話してみよう——ラオス語の特徴」『ラオスを知るための60章』菊池陽子；鈴木玲子；阿部健一（編），264-268 ページ所収。東京：明石書店。
- 上田玲子. 1996. 「言語」『もっと知りたいラオス』綾部恒雄；石井米雄（編），93-102 ページ所収。東京：弘文堂。
- 安田敏朗. 2000. 「帝国日本の言語編制——植民地期朝鮮・満州国・『大東亜共栄圏』」『言語帝国主義とは何か』三浦信孝；糟谷啓介（編），66-83 ページ所収。東京：藤原書店。

田村慶子. 『多民族国家シンガポールの政治と言語——「消滅」した南洋大学の25年』明石書店，2013，206p.

I 各章の概要

著者は1956年に開学し1980年に「消滅」した南洋大学（Nanyang University，以下南大）というシンガポールの私大の歴史を、報告書など多くの一次資料にあたり丁寧に辿っている。著者によれば本書ではこの歴史を「数では圧倒的に英語派に勝るものの、政治権力からは遠かった華語派華人が英語派との抗争の末に社会の周縁に追いやられていく過程であり、権力の側から見れば、多民族多言語の社会において民族の言語や文化をどのように政治的に管理するかという政治と言語の葛藤の歴史」と捉えて分析している（p.20）。

第1章では、権力側の反対の中、華語派華人の言語と文化遺産のシンボルとして南大が設立される経緯を考察している。南大はシンガポールやマ